



鹿児島県護憲平和 フォーラム情報

NO-11 2012.3.30

発行：鹿児島県護憲平和フォーラム E-mail:kenheiwa@bronze.ocn.ne.jp
連絡先：鹿児島市鴨池新町5-7 TEL 099-252-8585 FAX099-258-4560

禍は根元から断とう！

3.11 東日本大震災の1周年が過ぎました。被害を受けた人々への国民的支援はそれなりにありましたが、政府の復興施策は遅々として進んでいません。例えば瓦礫の広域処理にしても、被災地域に焼却施設を建設すれば雇用も生むし将来的にも利用可能、その時間も十分あった、広域焼却はこれの補完と位置づけるべき、とする意見もあります。この背後には放射能の拡散を最小限にとどめたいとの意思があります。

地震・津波は自然災害ですからこれを無いものにするのは不可能です。そこから防災の必要性が生じました。古い記録や民間伝承、近くはいくつもの大震災や大津波、その他の自然災害の被害体験から防災対策が実施・改善されています。でも残念ながら防災は万全とはならず、災害の後追いとなって繰り返し被害が生じてしまいます。自然との闘い、いやもっと良い言い方では、自然との共生はかくも難しいのです。

東京では3.11大震災の時、交通が機能不全となり、何百万の人々が歩いて帰宅を試み大混乱に陥り、「帰宅困難者」という用語が生まれました。最近のニュースでは東京のある区が「帰宅困難者支援対策」を策定したとのこと、必ずしもその区民のためだけではない帰宅困難者への支援策には頭が下がります。しかしこれも対症療法で効果には限界があります。大事なことはその災害の根本原因を取り除くことですが、自然災害は取り除きようもありません。ならば社会機能を過度に集積し、人口過密となっている大都市を適正規模にすることが最大の防災対策なのでしょう。

鹿児島県護憲平和フォーラム 代表 荒川 譲

あの時の東電福島第一原発での事故は典型的な原発震災でした。これは明らかに人災です、そこに原発がなければ生じない災害だからです。福島原発事故については技術、医学、社会経済的観点など、諸論評がありますが、それに立ち入る紙幅はありませんので、原発防災は可能かについてだけを考えてみます。結論は云うまでもなく「ノー」でしょう。人工物である以上原発事故は必ず起こると当事者も言い、その際放射能を完全に閉じ込める技術の完成は不可能です。また人体その他の生命体への放射能・放射線の影響も解明されていません。そうなれば唯一の原発防災はその原因物＝原発を取り除くことですし、それは可能です。ただし廃棄物の管理は世代を超えて続けねばならないのは現世代として慙愧に堪えません。この側面からも今すぐの脱原発が不可欠なのです。

原爆と原発は同じく否定さるべきものです。今では自然界では生じない核分裂連鎖反応を人工的に起こして核エネルギーを取り出して利用する仕組みですから、これ自体が反自然です。そして原爆は核エネルギーを発散させればよい技術ですが、原発はその核エネルギーを制御しようとするもので、いずれも人智を超える自然への挑戦であり、自然を征服しようとする傲慢な発想です。人類は核と共存できないのです。人類は自分が自然の一部であるが故に自然と共生すべきであって、そのような文化・文明を全力で早急に構想し実現せねばなりません。「3.11」が私たちの生き方を転換させる新たな出発点であるとはこのことなのでしょう。

「3.11 は人権に目覚めた私たちの 新たな出発の日」(落合恵子さん)

「さようなら原発 1000 万人アクション」開催

6000 人が結集 3月24日 東京・日比谷野外音楽堂

県護憲平和フォーラム代表 荒川 譲

2012年3月24日に予定されていた「さようなら原発 1000 万人署名集約集会」は、署名の集約締切日が5月末日に延長されたため、標記の集会名に変更された。

3月24日昼ごろの東京都心の空は、気象予報を裏切って、厚い雲に覆われて、時折大粒の雨滴が落ちてきていた。肌寒さだけは予報に違わなかった。この有難くない天候をものともせず日比谷野外音楽堂は6000人を超す人々であふれ、「すり鉢の縁」にあたる後方の通路は傘や雨合羽の人々で幾重にも人垣ができていた。私たち鹿児島勢4人—前日から会議で上京していた山崎事務局長と助っ人に来てくれた在京中の山崎家の二人の女性と私—はその通路に鹿児島県護憲平和フォーラムの幟旗をたてて陣取った。

集会は13時からオープニングとして山本コウタローさんのトーク&ライブで始まり、主催者である呼びかけ人・鎌田慧さんと澤地久枝さんはそれぞれに脱原発のエネルギー社会を実現するために現在550万筆の署名を目標の1000万筆達成に向けて一層頑張ろう、命と比べられる経済性などない、まだ社会に残る脱原発を白眼視する風潮に抗して勇気をもって「原発いらぬ」と表明し1000万署名を達成しようとあいさつした。賛同人の辛淑玉さんは若き日の貧困と被差別の体験を例に原子力発電がいかに差別の構造の上に成り立っているかを語り、「さようなら原発」を実現しようと熱く語った。

続いて各地・各団体からとして、福島現地から大内良勝さんが「原発事故から1年…」、新潟から小島誠さんが「柏崎刈羽原発6号機停止／東電全原発停止を受けて」と題して現状報告、実行委員団体から川野浩一原水禁議長があいさつを行い、「各地からの署名のおたより」10通を俳優・林洋子さんが朗読した。

集会の最後に呼びかけ人・落合恵子さんが2011年3月11日は本当の人権に目覚めた私たちの新たな出発の日だったのだ、原爆も原発も存在してはならないことを忘れないためにも、もう一度2011年3月11日に戻ろうと呼びかける「まとめ」を述べて集会を終了した。

続いてパレードに移った。パレードコースは2種類で、コース1は日比谷公園から左方向へ進んで東電本社前からJRのガードをくぐり、外堀通りへ左折して銀座、有楽町駅、東京駅八重洲口を経て常盤橋公園で解散、コース2は公園から霞ヶ関方面へ出て経済産業省前を経て虎ノ門で右折、溜池まで進んで六本木方向へ左折、坂の途中の三河台公園で解散であった。コース1は市民団体、生協、産直団体が行進、私たち平和フォーラム関係団体や労働組合にはコース2が割り当てられた。交通規制もあったのか意外に車の渋滞も少なく、警備の警官も穏やかであった。他方、パレードのシュプレヒコールのリードも遠くに聞こえるだけで、私たちにはリーダーもおらず、いささか緊張感に欠けるものだった。九州の仲間の幟旗は見当たらず、宮崎からの参加者2人と出会っただけであった。また集会の途中から雨は止んでいたが、六本木近くでは西日がまぶしかった。

東京での6000人の集会・パレードではマスコミを動かすに至らず、スピーチにもあったように脱原発の想いはまだまだ社会に定着していないことを思い知らされた。今後は各地で署名の目標数達成に努力するとともに、次回7月16日の東京・代々木集会には10万人以上が結集したいものだ。

原発いらない！3.11 福島県民大集会 報告

3月11日 郡山市 開成山野球場
鹿児島県護憲平和フォーラム代表 野呂 正和



東日本大震災から1周年目の3月11日、福島県郡山市の「開成山野球場」で、「**原発いらない！3.11 福島県民大集会**」が開かれ、全国から16,000人が参加し、「**安心して暮らせる福島をとりもどそう**」と、脱原発への誓いを新たにしました。同集会は県内の農林漁業団体、生協、女性、平和団体など様々な組織の代表が呼びかけた実行委員会が主催しました。

集会に先立ち、歌手の加藤登紀子さんが特別参加し、被災地へ思いを込めた「今どこにいますか」など6曲を熱唱。ピアノ伴奏には、私野呂の友人江草啓太さんが参加しました。また、日本音楽協議会福島支部のみなさんも、原発立地の会員が作った「望郷」などを歌い、原発反対のメッセージを訴えました。

集会は、開会を集会実行委員長の竹中柳一福島県平和フォーラム代表が宣し、「再びあの日が巡ってきた。福島犠牲を無駄にしないよう、原発いらないの声を大きく上げましょう！」と呼びかけました。また、呼びかけ人代表の清水修二さんからは「原発いらないの声は痛恨の思いを込めた県民の叫び。この声を全国に届けるのは私たちの使命だ。ともに前進しよう」と訴えました。



大震災が発生した午後2時46分に、震災の犠牲になった人々を追悼して全員で黙祷を行いました。「原発はいらない！私たちはいま、全国民に向け、高らかに宣言します」と集会宣言を提案し、満場の拍手で採択しました。ドイツから参加の平和団体代表からドイツ国内で呼びかけて集めた千羽鶴の贈呈の後、集会を閉じました。集会後、市内の3コースに分かれてデモ行進が行われ、参加者はのぼりやプラカードなどを手に、「原発いらない！」「再稼働を許さない！」「エネルギー政策の転換を！」などと、アピールしました。

県民大集会でのあいさつ (実行委員会のHPから転載しました)

竹中 柳一さん (大会実行委員長)

原発いらない！3.11 福島県民大集会に県内各地から、そして全国から駆けつけて下さいました皆さん、本当にありがとうございます。私たちにとって、この3.11は決して忘れてはならない特別な日になっています。地震・津波、多くの人々が命と財産を失いました。その事に加え私たちは、原子力発電所の事故とその結果拡散した放射性物質により、今なお不安と苦しみの中で生活しています。私たちは多くの物を失いつつあります。豊かな恵みをもたらしてくれた水田や畑、そして自然の全てが放射性物質によって汚染されました。多くの県民が自然豊かな故郷から追われました。そして多くの子どもたちが、赤ん坊、幼児を含め県外に転校、避難しました。数々の災害や戦争、多くの困難を克服し、現在の豊かな暮らしを、豊かな暮らしの基礎を築いてくれた先人たちの尊い努力が、放射性物質により失われようとしています。そして同時に、福島県の将来を担う子どもたちや若い世代を失おうとしています。3月11日が、再び巡ってきました。この日だからこそ、現在の私たちの苦しい状況をお互い共有しながら今後について思いと決意を新たにすべきだと考え、この集会を企画しました。この集会が福島とそして日本の新しい変革のスタートとなる事を願い開会を宣言いたします。



大江健三郎さん「子どもたちの大きい歓声が響くだろう ということ、私は想像します」

連帯のあいさつに作家の大江健三郎さん(「さようなら原発 1000 万人署名」呼びかけ人)が駆けつけ、「私どもが東京で大きい集会(2011年9月19日の明治公園集会)を開催しました。そこで、落合恵子さんがジョン・レノンのイマジジン(想像)のことを言われました。一つ想像することがあるんです。それは近い将来のある日、ある朝、この国の全ての小学校、全ての中学校、全ての高校で校庭に生徒たちが集まる。そして、先生が或いは生徒代表がこういうことを告げることになる。「皆さん、この国は原発を全廃する事を昨日決意しました」。それが私たちの将来です。

私たちの未来に原発事故の不安はもうありません。そして子どもたちの大きい歓声が響くだろうことを、私は想像します。それを実現させましょう。原発事故を絶対に起こさない方法は、原発をなくすことだ。私は、政府が原発の全廃を宣言し、子どもたちが歓喜する姿を想像している。それは必ずできます。

山形・米沢市に子どもと避難している管野智子さんは「一刻も早く元の生活に戻りたい」と述べ、二本松市で有機農業を営む菅野正寿さんは「農業と原発は相反するものだ」と原発反対を強調しました。相馬市で一家で漁業を営む佐藤美絵さんは「また、相馬のおいしい魚を全国に届けたい」と思いを語り、飯舘村から避難を余儀なくされた管野哲さんは「こんなことになった責任はだれがとるのか！」と憤りを露わにしました。富岡町の高校から転校した鈴木美穂さんは「私たちの将来を考えてほしい」と若い世代も悲痛な叫びを上げました。



2000 人のさよなら原発!! の声

2012年3月11日(日) 鹿児島中央駅前



3月11日、さよなら原発!! 鹿児島パレードが鹿児島市で元気にとりくまれ、県護憲平和フォーラムに結集する多くのみなさんが家族ぐるみで参加しました。

市民が主体となって、政党色はもちろん、労働組合色もできるだけ出さずに企画され、事務局の反原発かごしまネットのみなさんの奮闘で成功をかちとる

ことができました。実行委員会の共同代表には橋爪健郎さんをはじめ荒川譲さんや野呂正和さん、鳥原良子さんなどが個人の資格で名を連ね、川内原発増設反対鹿児島県共闘会議をはじめ県護憲平和フォーラムに参加する労組・団体や多くの市民団体、県労連加盟の労組など幅広い93団体が参加しました。

10時から鹿児島中央駅東口ひろばで催された「太陽の広場」では、震災支援チャリティーマーケットがおこなわれ、仮設舞台でのNO NUKES STAGEでは賑やかに演じられました。

13時からの「さよなら原発集会」は、共同代表の橋爪健郎さんが主催者を代表してあいさつをした後、川内原発建設反対連協の鳥原良子会長、大谷幼稚園の園児の歌声、原発なくそう!九州川内訴訟弁護団の森雅美弁護団長、有機農業を営んでいる園山さん、3.11チラシを作成したイラストレーターの犬寺聡さん、高校生、千葉から避難してきた2人の小学生などが「さよなら原発!」を訴えました。

川内つゆくさ会の森永明子さんが提案したアピールでは、①川内原発1号機、2号機を廃炉にすること、②川内原発3号機の増設を中止すること、③再生可能な自然エネルギー社会へと移行していくことを誓いあいました。会場では、さようなら原発1000万署名もとりくまれ、250筆集約されました。

14時からの「パレード」に向けて、自治労県本部の永福豊青年部長が行進の指示をし、元気よくシュプレヒコールをおこないました。その後、電車通り沿いを高見馬場、天文館、いづろを経由して朝日通で折り返し、鹿児島中央駅まで返ってくるロングランコースでしたが、道行く市民に「さよなら原発」をアピールしました。なお、パレードの成功へ向けて街宣車の運行やバス停ごとの誘導員などの誘導員など、各労組や社民党のみなさんの協力をいただきました。

